

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.87

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

<エッセイ>

道後の漱石に出会う

馬 本 勉

道後には何度足を運んだことだろう。学生時代は毎春、道後温泉本館から少し上った丘に立つ武道館で合宿をした。一週間、每晚「坊っちゃん湯」に浸かったものだ。卒業して勤め始めてからも、学会や研修会、高校訪問など、訪れる機会は多い。瀬戸の島々を眺めながらの船旅もまた格別で、私にとって松山は、いつでも訪れたい街のひとつだ。

今年の日本英学史学会全国大会は、11月5日(土)、6日(日)の2日間、松山大学の桶又キャンパスで行われた。

松山が「英学の地」であることは、漱石が一年間滞在したことと縁が深い。小説中の坊っちゃんは「四国辺のある中学校」の数学教師だが、作品は漱石が明治28年4月から1年間、愛媛県尋常中学校(松山中学)で英語教師をつとめた体験が下敷きとなっている。わずか1年の滞在中で、漱石はどれほど松山に愛着を抱いたのだろう。道後温泉は好んだようだが、学校や生徒への思いは複雑であったようだ。それなのに、漱石の去った後の松山は、彼をとっても大切にす。坊っちゃん湯ばかりか、坊っちゃん列車、坊っちゃん団子、坊っちゃんスタジアムなど、どこへ行っても「坊っちゃん」ばかりだ。(写真は、道後温泉駅そばの「坊っちゃんからくり時計」)



今年には漱石の没後100年。大会初日に行われた竹中龍範先生の特別講演は、漱石の松山での

一年を知る貴重な機会となった。「松山時代の漱石」というタイトルのもと、来任のきっかけ、授業の様子、熊本転任時の思いなど、英語教師・夏目金之助の姿を非常に分かりやすく紹介された。なかなか手にすることのできない現物資料をもとに、当時の教育制度、学校、教授法、教材などの実際を示されたことは、英語教育史上の漱石の位置を確認する上で、極めて重要であると感じた。卓越した英語力を背景とする漱石の授業は、訳だけではだめで、言葉の排列(シタックス、グラマー)や、語の成り立ち(プレフィックス、サフィックス)にやかましかったようだ。よくわかる授業で英語の面白味を感じさせ、発音も流暢であった。「文法も何もかも時間をもたせれば、君等をもっと解るやうにしてやるのだが」と言う漱石は、生徒の持つ辞書の誤りを指摘するなど、「教授には十分余力を余して」おり、尊敬された。しかし一年の教師生活の後、生徒に「勉学上の態度が真摯ならざる」という告別の辞を述べ、熊本へ転じたという。

竹中先生のお話から、松山の漱石は予想以上に熱い教師であった、との印象を受けた。『猫』の我輩は、「教師というものには実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はない」

「それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはない」と言う。漱石の学問をもってすれば「楽」であった暮らしも、対人面で「つらい」思いをしたのだろう。漱石の複雑な思いは、やがて『坊っちゃん』を傑作にし、松山の人々は一層漱石に親しみを覚えた。それは皮肉なことだったかもしれない。しかし、漱石の松山への思いがどうであれ、松山行きフェリーと道後温泉を愛する私の気持ちは変わらない。

(県立広島大学/中国・四国支部事務局長)

平成28年度 総会・第1回 (通算74回) 研究例会 報告



安田女子大学 9523 教室にて (2016.5.28.)

日本英学史学会中国・四国支部 平成28年度総会、及び第1回 (通算第74回) 研究例会は以下の通り開催され、盛会裏に終了いたしました (参加者15名)。ご参加くださいました皆様に、心より厚くお礼申し上げます。

日 時： 2016年5月28日 (土)

会 場： 安田女子大学 9号館 9523 教室 (5階) 〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東6-13-1

支部総会 (13:20～13:50)

議長選出, 前年度活動報告, 会計報告, 会計監査報告, 新年度活動計画, 他

開会行事 (14:00～14:05) 支部長挨拶

研究発表 (14:05～15:15)

「助動詞「た(だ)」の英・仏語訳をめぐって—『出家とその弟子』とその英仏訳本からの考察—」
野村 勝美 (日本英学史学会中国・四国支部会員)

資料紹介 (15:30～16:40)

『広島英学史事典』掲載項目候補リストにみる広島英学の系譜

馬本 勉 (県立広島大学)

閉会行事 (16:45～17:00) 副支部長挨拶, 写真撮影

懇親会 (18:00～20:00)

とり楽 毘沙門店 (広島市安佐南区大町東4-10-28 TEL 082-879-3166)

研究発表

助動詞「た(だ)」の英・仏語訳をめぐって：
『出家とその弟子』とその英仏訳本からの
考察

野村 勝美 (本学会会員)



【発表を終えて】

発表者は『出家とその弟子』(「序曲」と「第一幕」)に現れた助動詞「た(だ)」が、同書の英訳本(1922)・仏訳本(1932)の中でどのように翻訳されているかを調べ、抽出し、分析・分類・考察していき、その結果、英仏語訳において「た(だ)」はほぼすべての品詞(動詞・準動詞以外に名詞、代名詞、形容詞、副詞、前置詞、間投詞)及びそれ以外に姿をかえて翻訳されていることを明らかにし、その様(翻訳関係)はまるでビッグバン(singularityのexpansion)のようであるという感想を以って、報告を結んだ。

【参加者の感想】

- ◆いつも詳細な内容のご発表に敬服しております。今回のご発表により、改めて或る言葉を他言語に訳すには単純なことばの置き換え作業では済まないと感じました。また、翻訳が一種類しかないとき、訳文に訳者の解釈や翻訳能力をどの程度考慮すべきかという問題にも興味を抱きました。<Emma>
- ◆「出家とその弟子」野村先生の長年にわたる研究に敬意を表します。教師として英語を生徒に教え込む現役時代の先生の真摯なお姿を拝見した気がしました。<東洋美人>
- ◆今回も倉田百三の『出家とその弟子』英訳版に係るご発表でしたが、それに仏語訳を加えて、日本語の助動詞「た(だ)」がどのように訳されているかがテーマになっていることが発表題に窺われるものの、後の質疑応答でも問いと答とがかみ合っていないよ

うに思いました。例えば、倉田百三の日本語にこの助動詞の使い方について特異なところがあり、それがどう訳されているかというようなことを分析するのであれば、調べてみると Glenn W. Shaw は他にも芥川龍之介や菊池寛、二葉亭四迷、山本有三の作品なども訳しているようなので、これらにおける「た(だ)」の訳し方と比較するとかして、その特異性を Shaw がどのように訳し分けているかを分析する、あるいは、馬本先生の質疑にあったように、倉田の作品が他にも英訳されたものがあるとのことなので、これとこの Shaw による訳において「た(だ)」の訳し方を比較すると Shaw の訳には特異性が見られるということを分析提示するというようなアプローチをとられないと、研究発表としては「だから何なの」との印象が拭い切れません。また、英訳版と仏訳版とを並べることについても、例えば、英語の時制範疇と仏語の時制範疇ではこれとこれとが対応するのに、『出家とその弟子』を起点としてみたときに両訳の間ではそのような対応が見られないということが具体例を基に分析されているというようなことがないと、比較文法・表現法の観点からの発表とも捉えにくいように思います。論文としてまとめられる際には、研究論考としての体裁、内容を整えていただくことを期待しております。<Dragon>

◆野村勝美先生の『出家とその弟子』の英仏訳本の分析は相当な労力と時間を要したものに違いないと感銘を受けた。今後の研究のさらなる継続を期待したい。<Mappy>

◆野村先生の発表は、英訳本と仏訳本の比較分析であった。それぞれの翻訳の仕方の違いが、両国語の差によるものなのか、翻訳者の背景の差によるものなのか、大変興味深い点である。次回の発表も楽しみである。<YH>

◆「た(だ)」, 英語訳, 仏語訳それぞれが「変数」のようであり、何がどうしたのかが今ひとつ不明であった。<もみじまんじゅう>

◆倉田百三の『出家とその弟子』の英訳, 仏訳に長年取り組んでおられる野村先生の、今回もまた一風変わった(独特な)視点からの綿密なるご研究の発表であった。助動詞「た(だ)」が、想像を超える使われ方をされ、それが英訳, 仏訳にどのような訳され方をされているのかは、極めて興味ある問題提起であった。ただし、翻訳者の解釈の「くせ」をも踏まえて、各々の文が動詞的な訳なのか、名詞構文的なのかも分析した上で、「た(だ)」の使われ方を示して頂くと、より面白いものであったらと思う。これは少し欲張りかもしれないが。<風呂 鞆>

◆野村先生の綿密な読みと考察には感心しました。特に英語だけでなく、仏語も比較されており、英語だけでも汲々としている自分にとっては驚きでした。

直接には関係ありませんが、英文学作品がどのような日本語に翻訳されているかを考察した書に、『嵐が丘』の日本語表現(小橋純夫 著 平成24年発行)があるので紹介します。これは "Wuthering Heights" を文法項目別に12種類の訳文を比較したものです。<JH4DGW>

◆日・英・仏の言語の違いを教えてください、言葉の奥深さを知ることができました。<中舛俊宏>

◆『出家とその弟子』の英仏訳を継続して分析しておられる野村先生のご研究に感銘を覚えました。Steinilber-Oberlin の仏訳には松尾邦之助、Glenn Shaw の英訳には奈倉次郎が関わっていますが、翻訳の過程で「日本人による仏訳、英訳」が存在したのだらうと思われまます。そうすると、二人の日本人による日本語助動詞の解釈が、最終的な訳文に影響を与えたのではないかという気がします。そうしたことを思いながら、先生のご発表を興味深くうかがいました。ありがとうございました。<Horse>

◇ ◇ ◇

資料紹介

『広島英学史事典』掲載項目候補リストにみる 広島英学の系譜

馬本 勉 (県立広島大学)



【発表概要】

中国・四国支部の前身である広島支部において、『広島英学史事典』の出版を目指した小委員会が昭和57年に発足し、小項目(見出語)選定の作業が進められた。この事典は完成をみていないが、昭和58年にまとめられた小項目一覧には、広島英学を知る上で重要な人名300、学校名80、事項ほか150が収録されている。本発表では、30年以上前に作成された小項目一覧(手書きリスト)を紹介し、その特

徴を明らかにするとともに、追加候補を交えて、現代的な意義を考察した。フロアから小委員会のメンバーでいらした先生方のコメントを頂戴できたことは幸いであった。本報告をきっかけに、『事典』議論が再燃することを願っている。

【参加者の感想】

◆『広島英学史事典』という構想があったとは知りませんでしたので、大変興味深く聞かせていただきました。また、追加候補や中国・四国への拡大案などを聞いて、先生の英学史に対する関心の深さや広さを知ることができました。<Emma>

◆『広島英学史事典』は、広島支部発足時よりの支部を挙げての企画でしたが、さまざまな事情でその構想が潰れてしまいました。その最初期に関わった一人として残念に思いますが、これを今再スタートしようとする、広島支部が中国・四国支部に版図を拓げたことにより、その範囲を広げるのかどうか、これを拓げた際に取り上げる事項について精粗繁簡のバランスがとれるのかどうかというような問題の検討に加え、バブル経済の崩壊に出版不況と呼ばれる状況が続く現今の時勢下に、果たしてどのような軌道修正が求められるのか、さらには、その以前にそもそもこの構想自体に現実味があるのかが問われるような気がいたしております。中国・四国支部の中にあつて、岡山グループの先生方の中には岡山の英学史をまとめ、刊行するとの動きもありますので、まずは、広島県を範囲として『広島(の)英学史』のようなものを目指すというほうが現実的ではないかと考えます。中国・四国支部を企画母体とするにしても、まずは広島県在住会員を主軸として、テーマによっては関心のある会員が他県在住であっても応援執筆をするという形で加わるところでしょうか。その上で『熊本英学史』のようなものをまとめ上げることができればよいのではないのでしょうか。これがさらに支部内他県の「英学史(研究)」に発展すればよいのではないかと思います。<Dragon>

◆松村幹雄先生の手書きの原稿、懐かしく拝読「夢」を形あるものにするとの意気込みが伝わって参りました。辞書づくりの話、小説「舟を編む」を連想しました。<東洋美人>

◆『広島英学史事典』刊行の計画があったことを知り、完成すれば大変参考になるものになると思います。是非当初かかわっておられた五十嵐先生や竹中先生をはじめ学会関係者の協力が進められることを期待します。<JH4DGW>

◆広島英学史の幅広さと、当時の先生方の熱い思いに心打たれました。今の教育にも生かせるような形で、まとめて読めるものがあればと思います。

<中舛俊宏>

◆33年前の企画が実現できていないもどかしさ、責任を痛感する機会となりました。それにしてもこれだけ多くの項目の執筆者(協力者)を確保するにはどのようにしたらよいか途方にくれてしまいました。8名の「サムライ」のうち、生存者(?)が3名、広島英学の系譜をどのように見つめなおしたらよいのでしょうか。<もみじまんじゅう>

◆『広島英学史事典』の作成を目指す、膨大で、野心的なプロジェクトの過去の計画についての発表は、オーディエンスに大きなインパクトを与えたように思います。これをもう一度という発表者の意欲も十分に伝わって来て、できれば協力してあげたいという気持ちになりました。が、実践になると大変な困難を伴うことになることも覚悟しておかねばならないと思います。ここは若い人のダッシュユルに期待するのが上策かと思えます。がんばってください。

◆昭和56(1981)年、8名で始まった『広島英学史事典』(仮称)編集プロジェクトの全貌(?)を、まことに要領よく纏めて紹介して頂いた。先人(存命の方も含む)の積年のご苦勞、後世の人々に喜んでもらえるものを残そうとする、一大偉業へのロマンチックな夢は、我々一人一人の心を揺さぶる。この事業が何とかして日の目を見ることを祈りたい。

<風呂 鞞>

◆馬本勉先生の発表は資料紹介というものとどまらず、英学史全般にわたる項目、情報に満ちているように思う。重要なのは関わった先生方により作成された掲載項目リストにあるように思われる。

<Mappy>

◆30数年前、松村先生を中心に計画された、壮大なプロジェクトが明らかになった。人名事典なら実現可能かもしれないが、学校、教科書、辞書まで網羅している。実現可能性を考えると荒唐無稽にも見えないこともないが、それ程当時の支部はパワーに溢れていたということであろう。感銘を受けました。

<YH>

【研究例会全体について】

◆モーレツに爽やか! 事務局ならびに関係者の皆様のご尽力のたまものです。<もみじまんじゅう>

◆やはり参加者数がもう少し増えないかと期待するところ大です。学会入会を含め、若い人たちに興味を持ってもらうことに努めるとともに、英学史という研究分野があることを知らない人もおられようかと思われ、こういう方々にどのように広報すればよいのかについても検討しなければならぬかと思えます。<Dragon>

◆事務局のご配慮でスムーズに会が進んでいますこと感謝しています。不参加の理由はいろいろありましたが、もうすこし参加者が増えればと思います。

<東洋美人>

◆懇親会ではくつろいで、よく飲み、食べ、しゃべり、楽しく過ごせました。お世話いただいた馬本先生、松岡先生をはじめ関係者の先生、ありがとうございました。<JH4DGW>

◆いつもながらの理事の先生方の細かな配慮で、大変良い研究会となりました。ありがとうございました。<中舛俊宏>

◆色々お世話になりました。ありがとうございました。<YH>

◆会場をお世話くださった松岡先生をはじめ、ご参加の皆様に感謝申し上げます。この会に参加すると、一年頑張れる、と思う私です。<Horse>

中国・四国支部ニュース

>> 平成28年度支部総会

平成28年度支部総会は、5月28日(土)午後1時20分より、第1回研究例会に先立って行われました。議長として山田昌宏会員を選出し、以下の議題について、すべて原案通り承認されました。

1. 平成27年度活動報告(事務局)
2. 平成27年度会計報告(会計担当理事)
3. 平成27年度会計監査報告(会計監査)
4. 会則の一部改正について(事務局)
5. 平成28年度活動計画(事務局)

1. 平成27年度活動報告

事務局より昨年度の活動について報告しました。内容は、(1)支部総会、(2)第1回研究例会(広島)、(3)第2回研究例会(福山)、(4)『英學史論叢』第18号の発行、(5)『ニューズレター』No.82~No.85の発行、(6)理事会の開催(第1回、第2回)、の6項目です。詳細は『英學史論叢』第19号(pp.41-44)をご参照ください。

2. 平成27年度会計報告

3. 平成27年度会計監査報告

次ページに両報告を掲載しています。

4. 会則の一部改正について

第10条第2項として、次の文言を加えることとしました。「年会費を2年間未納の場合は、会員資格を失う。」

これにより、第10条は次の通りとなります。

第10条 会費は1人年額3,000円とする。但し学生は2,000円とする。
2. 年会費を2年間未納の場合は、会員資格を失う。

例会当日、理事会を開催予定

2) 支部研究紀要

『英学史論叢』第19号(予定通り発行)

3) ニューズレター

No.86(平成28年5月、発行済み)

これ以降、年間発行数を減らすことを検討

No.87(本号)、No.88(年度内に発行予定)

5. 平成28年度活動計画

1) 研究例会

- ・第1回 平成28年5月28日(土)
広島市・安田女子大学にて。例会当日、理事会および支部総会を開催。(予定通り終了)
- ・第2回 平成28年12月10日(土)
倉敷市・ノートルダム清心学園 清心中学校・清心女子高等学校(倉敷市)

>> 平成28年度第1回理事会

第1回理事会は、支部総会に先立って行われ、支部総会報告内容、ならびに平成28年度第2回研究例会の計画を確認しました(出席者8名)。また、現在年4回発行しているニューズレターの発行回数を減らし、事務量の軽減をはかること、年会費滞納者への対応を明確にするため会則に文言を加えることを協議しました。

平成27年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計報告

収入の部		支出の部	
繰越金	312,217	通信費	21,452
年会費	102,000	印刷費 (紀要, ニューズレター)	76,978
紀要掲載料	6,000	事務費	972
補助金	14,000	会議費	25,566
ゆうちょ銀行利子	26	事務用品	3,762
収入合計	434,243	支出合計	128,730
		次年度繰越金	305,513

以上、ご報告申し上げます。

2016年5月18日

会計担当理事 鉄森 令子 ㊞

平成28年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計監査報告

各位

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類及び領収書等により監査いたしました。その結果、会計報告の通り、全て適正、正確に会計処理ができていたことを確認いたしました。

以上報告いたします。

2016年5月19日

会計監査 堂鼻 康晴 ㊞

会計監査 平本 哲嗣 ㊞

英学史学会全国ニュース

>> 第53回全国大会

2016年11月5日(土)、6日(日)、松山大学榎又キャンパス(愛媛県松山市文京町)において開催されました。

- ・特別講演(司会及び講師紹介):
中国・四国支部長 田村道美)

「松山時代の漱石」

香川大学教授 竹中龍範(本学会会員)

- ・史跡見学
松山藩藩校講堂「明教館」、旧制松山中学資料館(いずれも松山東高校内)、ロシア人墓地(松山に収容された日露戦争捕虜の墓地)
- ・第2日の研究発表(支部関係分)
「豊浦中学の英語教育に関する研究:外国人講師に焦点を当てて」(保坂芳男)

「スウィントン英語独習書に関する研究」(馬本 勉)
「漱石のライバル重見周吉:イェール大学ほか新資料から見える人物像」(菅 紀子)

>> 『英学史研究』第49号

平成28年10月1日発行
論文:「新渡戸稲造と松山事件」(菅 紀子)ほか

>> 「日本英学史学会報」No.140

平成28年10月1日発行
《英学史散策》
イェール大学訪問記—重見周吉の足跡を訪ねて(1) (菅 紀子) ほか
《書評》
江利川春雄『英語と日本軍:知られざる外国語教育史』(大前義幸)

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です。詳細は学会ウェブサイトをご覧ください。になるか、支部事務局までお問い合わせください。

英学史情報ひろば

会員業績, イベントほか

- ◇山田昌宏(2016).『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』山田昌宏.
- ◇森 悟(2016).『武信由太郎伝』森悟.
- ◇安部規子(2016).「修猷館の英語教育:昭和初期の自作英単語集『英語単語と其の用例』について」『久留米工業高等専門学校紀要』31,(2), pp.7-13.
- ◇佐古敏子「英学黎明期の英文法書における文法用語の訳述起源について: Verbsにかかわる訳語, 概念の変遷を視座に」日本英学史学会関西支部『関西英学史研究』第9号, pp.3-23.
- ◇『LRT研究紀要』第4集(2016)
深澤清治「講演・現在から見た英語教育の不易と流行」pp.2-7.
Uesugi, Susumu. “Robert Louis (Balfour) Stevenson: The last years in Samoa.” pp.19-31.
- ◇第189~195回「広島ラフカディオ・ハーンの会」ニュース(2016年5月~2016年11月)

- ◇八雲会編『へるん』第53号(2016).
「八雲会創立100年記念シンポジウム 八雲の記憶が息づくまち・松江をつくった人々:第一次八雲会の創立から小泉八雲記念館の開館まで」(パネリスト:池橋達雄, 風呂鞆, 小泉凡, 日野雅之) pp.13-25.
小泉凡「小泉八雲庭園の誕生と意義」pp.34-38.
風呂鞆「ハーンと幻想画家ルドン」pp.39-43.
風呂鞆『タイムズ・デモクラット』紙の社説「花について」pp.64-68.
古川正昭「ギリシャ・ツアーが繋ぐハーン交流」pp.90-93.
風呂鞆「書評・田村のり子詩集『ヘルンさんがやってきた』」pp.136-139.
- ◇『日本英語教育史研究』第31号(2016)
竹中龍範「東京高等師範学校文科兼修体操専修科のこと」pp.1-24.
藤本文昭「書評・江利川春雄著『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』」pp.119-124.
江利川春雄「藤本文昭氏の書評に答えて」pp.125-128.

12 ページへ続く

中国・四国支部事務局より

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費（一般3,000円、学生2,000円）をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願ひいたします。

<p>ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合 (口座番号) 01360-9-43877 (加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部</p> <p>他の金融機関から振込む場合 (店名) 一三九 (イサキョウ) 店 (139) (口座番号) 当座 0043877 (加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部</p>
--

>> 紀要の配付と販売について

研究紀要『英学史論叢』は、会員の方へ一部ずつ、研究論考・研究ノート執筆には所定の部数をお渡ししています。最新号やバックナンバーをご希望の方には、一部1,000円（非会員1,500円）にて販売いたします（郵送料込）。詳細は事務局まで。

バックナンバー収載の研究論考等のタイトルは、支部ウェブサイトにてご確認ください。

『英学史會報』 『英学史論叢』 所収論考一覧 URL
<http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/eigakushi-kaiho-ronso.htm>

>> 『英学史論叢』 第20号記念号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英学史論叢』は、次号で第20号となります（2017年5月発行予定）。記念の号となりますので、ぜひ多数のご投稿をお願いいたします。

研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、以下に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・研究論考・研究ノートを投稿予定の方は、事前に「投稿申込」をお願いいたします。2017年1月31日までに事務局へ、メールまたはファックスにてお申し込みください。

メール: eigaku@tom.edisc.jp

ファックス: 0824-74-1725

・原稿提出の締切は、**2017年2月20日**（消印有効）です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートは、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等は1部お送りください。

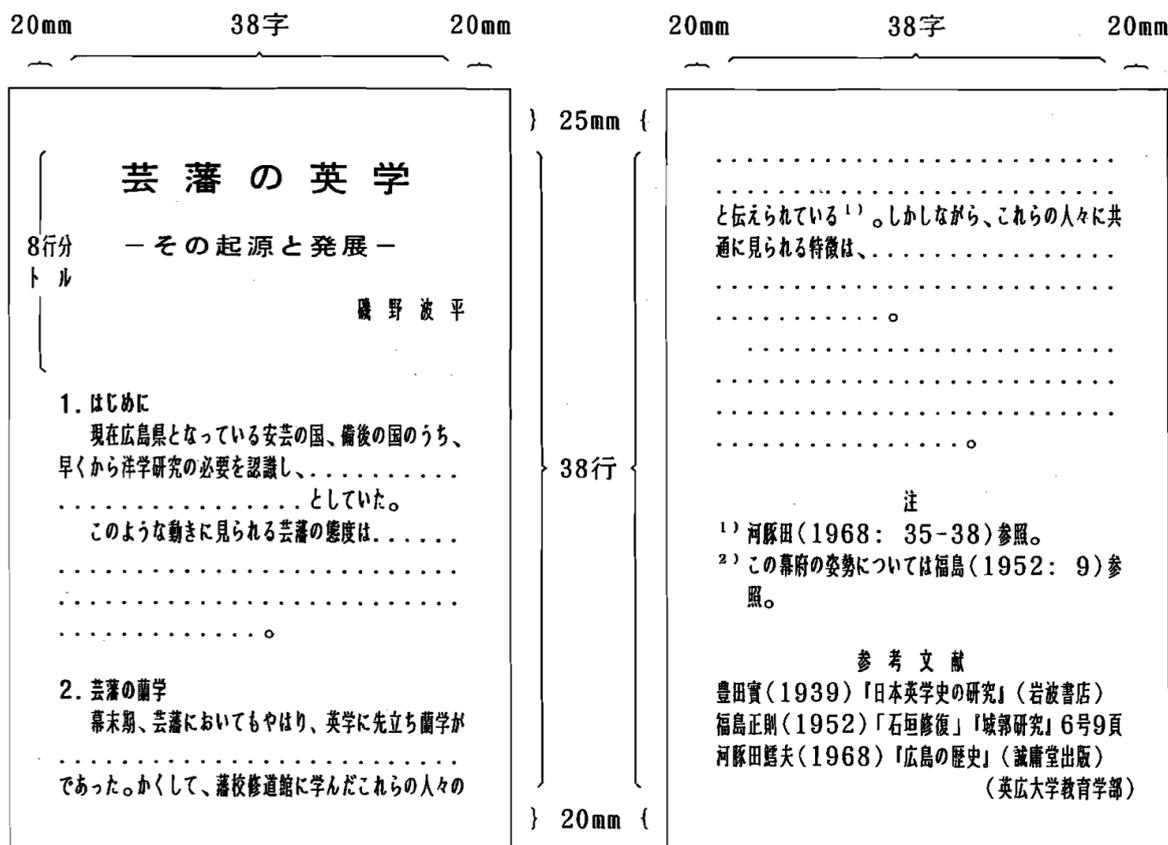
『英学史論叢』 執筆要領

- ・『英学史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいつたものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。

- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英学史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18～20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。
- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。



日本英学史学会 中国・四国支部
平成28年度 第2回(通算75回)研究例会(倉敷研究例会)のご案内

日時: 2016年12月10日(土) 13:00 受付開始
会場: ノートルダム清心学園 清心中学校・清心女子高等学校 記念館2階会議室
〒701-0195 岡山県倉敷市二子1200
参加費: 会員, 非会員とも無料

開会行事(13:30~13:40) 支部長挨拶, 会場校挨拶

研究発表①(13:40~15:20)

「岡山県の中学校・高等学校における英語教育に関わった人たち」 山田 昌宏(本学会会員)
「山田昌宏先生のご発表を受けて」 能登原 昭夫(元山陽学園大学)

先に『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』を作成したが、これは県内の中・高の英語教育に関する研究会、研修会、研究発表、研究論文、生徒の活動成果及びそれらに関わった方々、その他関係する国の施策等を時系列で年表形式にまとめたものである。今回はこの中から関わった人物の中で登場頻度の多い方を取り上げ、大学等、行政(指導主事等)、中学校・高等学校関係者別に、どのように英語教育に関わったかを具体的な事例を通して紹介したい。

研究発表②(15:40~16:40)

「明治末期小学校英語読本のリーダビリティ分析(その1):

The Mombusho English Readers for Elementary Schools を中心として」

河村和也(東京電機大学) 松岡博信(安田女子大学)

馬本 勉(県立広島大学) 小篠敏明(広島大学名誉教授)

本発表は、明治期~現代の英語教科書の英文難易度(リーダビリティ)を新開発の指標で量的に測定・比較する共同研究の中間報告である。今回分析された教科書は、明治30~40年代に高等小学校で用いられた宮井安吉(1900)『小学英語読本』(1~4巻)、神田乃武(1901)『小学英語読本』(1~4巻)、井上十吉(1902)『小学英語新読本』(1~4巻)、文部省(1908)『小学英語読本』(1~3巻)、計15巻であり、分析に用いた指標・ソフトは、Ozasa-Fukui Year Level, Ver.3.5 nhnc1-6である。発表では、特に、文部省『小学英語読本』を詳細に分析し、現行教科書との英文難易度の比較結果を示しながら、併せて他の3教科書の基礎データとの比較も行いたい。これらの量的分析を通して、当時の小学校英語教科書が現在の中学校教科書とどのようにつながっているのか究明していきたい。

閉会行事(16:45~17:00) 副支部長挨拶, 写真撮影

忘年懇親会(18:00~)

倉敷ステーションホテル海鮮料理「白壁」 棧敷席

JR 倉敷駅より徒歩3分, 会費 5,500円

お願い

- ・研究例会, ならびに忘年懇親会のご出欠を, 11月30日(水)までにご回答ください。
(ファックス, 郵送の方は, 同封の申込用紙をご利用ください。メールの方は eigaku@tom.edisc.jp まで)
- ・12月10日(土)にご宿泊をされる方は, 各自でご手配ください。JR 倉敷駅(在来線)周辺が便利です。

倉敷研究例会アクセスマップ

会場： ノートルダム清心学園 清心中学校・清心女子高等学校 〒701-0195 岡山県倉敷市二子 1200



マップは清心中学校・清心女子高等学校ウェブサイトより

JRを利用の場合

岡山駅から：山陽線下り列車（快速は除く）で3つ目の「中庄駅」で下車。所要時間約10分。

倉敷駅から：山陽線上り列車（快速は除く）で1つ目の「中庄駅」で下車。所要時間約5分。

中庄駅からのアクセス

① タクシー利用

改札口を出て右側（北側）の階段を降りてタクシー乗り場へ。清心高校まで約5分（料金1,000円弱）

※ 通常数台が駐車しているが、万一出払っているときは次に電話して呼ぶ。

吉備タクシー 086-462-1515

岡山交通・両備タクシー 086-460-0555

※ 理事会出席者は坂を登って高校校舎玄関前で下車，会議室棟1階会場へ
研究例会出席者は，坂の途中の守衛詰所前で下車，記念館2階会場へ

② バス利用

改札口を出て右側（北側）の階段を降りてバス乗り場へ。

岡山駅行きのバスに乗車，清心学園口下車。所要時間約5分。

中庄駅発 9:55, 11:40, 12:10, 13:10

※ バスの便は少ない上，清心学園口から丘にある校舎まで坂を徒歩で10分程度歩くことになるのであまりお勧めできません。

高速道路を利用の場合

山陽自動車道「倉敷IC」，または瀬戸中央自動車道「早島IC」から，いずれも約10～15分

英学史情報ひろげ

会員業績, イベントほか (7ページより続き)

◇日本英語教育史学会 第258回研究例会

(7月16日・東京電機大学)

江利川春雄「自著を語る・近代日本の陸海軍を英語教育史から見直す:江利川春雄著『英語と日本軍:知られざる外国語教育史』を素材に」

◇日本英語教育史学会 第259回研究例会

(9月17日・サテライトキャンパスひろしま)

藤本文昭「戦後英語教科書(読本)に登場した国家元首について～戦争と平和をテーマとして～、オバマ大統領の広島演説の前に何が検定教科書で語られていたか」

山田昌宏「自著を語る・戦後における岡山県の中学・高校の英語教育はいかになされたか:山田昌宏著『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』を素材に」

◇日本英語教育史学会 第260回研究例会

(11月26日・東京電機大学)

河村和也・若有保彦「自著を語る(特別編)・若林俊輔の英語教育論を再考する:『英語は「教わったように教えるな』を素材に」

会員の皆さまによる著書, 論文, エッセイ, 講演, 研究発表や, 英学史に関係する資料等の情報をお寄せください。どうぞよろしくお祈りします。

広島英学史の周辺(53) 今年度の総会報告でも触れましたが, ニューズレターの発行回数を減らすことを試行しています。今号では, 第1回例会報告と第2回例会案内を同時に掲載していますので, 少々盛り沢山の印象を持たれる方もあろうかと思ひます。お気付きの点, ご意見をお寄せください。▼冒頭のエッセイは, 支部長, 副支部長のローテーションでお願いしておりますが, 今回は諸々調整の上, 私が担当いたしました。久しぶりのエッセイは, 竹中先生のご講演から学んだことがらをもとに, 漱石をめぐるあれこれを思い出しながら, まとめるつらさと楽しさを覚える時間となりました。毎年一度ご担当くださる正副支部長に, どれだけのご苦勞をおかけしているか, 痛感した次第です。▼『我輩は猫である』の作中で, 猫の語る教師像を紹介しました。英語版では次のように書かれています。

I'm only a cat, but one thing is clear even to me:

teachers have it very soft. If you must be born human, it's best to become a teacher. Even a cat could do a job that allows you to sleep that much. According to my Man, however, nothing is as hard as a teacher's life. (R. F. Zufelt 訳, 洋販ラダーシリーズ, IBCパブリッシング, 2006年)

ここのhardの度合いは人それぞれでしょうが, 漱石の場合, それは教師をやめる選択へと向かわせるものだったのでしょ。▼今, 教師には, 猫が言うほどの眠る時間は与えられていないし, have it softでもなく, 教えること以外の業務も膨大です。もし漱石のように教壇を離れたら, 私には一体何ができるのだらう, と考えてしまいました。▼エッセイでも触れた瀬戸の船旅。今回もフェリーを選びました。夕日を眺めながらゆっくり考え事をする。普段の教師生活ではなかなか得られない, 大切なひとときでした。



▼全国大会では, 実行委員長をつとめた菅紀子先生に大変お世話になりました。この場を借りて, 厚くお礼申し上げます。松山の会員が増えて, 支部例会も道後でたびたび開けたらいいのに, と強く思いました。▼冬の例会は倉敷での開催です。山田昌宏先生にいろいろとご準備いただき, 心より感謝しております。私にとって初めての倉敷, 本当に楽しみです。▼カープ優勝の熱気さめやらぬまま, 師走を迎えようとしています。年末, 年度末へ向け, 本当に様々な行事や業務が待ち構えています。しっかり走り抜けられるよう, 今から知力, 体力づくりに励みたいと思います。▼では皆様, 倉敷でお会いしましょう。(馬)

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.87

2016年11月23日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村 道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.87 November 23, 2016